
僕の憧れの人 ジャンヌ S S

ルピナス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の憧れの人 ジャンヌSS

【Nコード】

N0906L

【作者名】

ルピナス

【あらすじ】

紳士とは彼のような人の事を言うのだろうか。僕の憧れのあの人は、ジャンヌ様のクライアントで……。今日も店に来られるだろうか……。…。

(前書き)

連載中の本編ジャンヌの、別話です。ジャンヌの店で働くフェクトという少年の視点で描いたお話で、タイミングは、本編第4話のパーティーと現在進行形な感じになります。

読んでも読まなくても、本編には支障ありませんが、読めばなんとなく裏設定とかも分かるかも？ 程度なSSです
宜しければ、御一読下さい。

路地に並べてあった安売り用の切花や小さな鉢植え達を狭い店内へと運び込んで、入口であるガラス戸に鍵を掛けた。それから、明日の為に売れ残りの花を選び分けて、仕入れ伝票やら売上金額の確認をする。といっても、町外れにあるとても小さな店構えの花屋だから、そんなに多くはない。

僕一人でも、十分に処理できる範囲の量だ。

店内の照明を半分落として、明日届ける予定のアレンジの注文を確認した。予定では、昼過ぎに2件の注文が入っている。これは、普段に比べたら多い方だった。

通りすがりになんとなく花を1輪買っていく人や、慌てた様子で忘れ物でも取りに来たかのように花束を買っていく人など、殆んどが常連客とは程遠い。だから、売上も安定しないし、切り盛りは大変だ。

そんな店でも、常連客と呼べる人物が一人だけいる。その人は、とても紳士的で好感の持てる僕の憧れる人物だった。背や肩幅は広く、ブロンドの髪にスカイブルーの瞳、そして何より落ち着きのある余裕で男らしい物腰が、男である僕でも惹きつけられる。

先日、店のオーナーであるジャンヌ様の所へ仕事の話をしに来ていたけど、ジャンヌ様とはお世辞にも馬が合うとは言いがたい。

ジャンヌ様が一方的に毛嫌いしているだけなんだけど。

伝票を整理し終わって、店の防護壁を下ろそうとボタンを押そうとした時、ガラス戸の外に人影があるのを見つけた。

仕事帰りのお客様だろうか。

近づいて、よくよく見れば、それは僕の憧れの人だった。

急いでガラス戸の鍵を開けた。

「やあ、フェクト。もう店じまいかい？　いつもより早いのだね」

「ロイ様」

ロイ・スプレンダー・ガーディナル。ジャンヌ様のクライアントで、裏の顔を知る数少ない人物の一人。

「ジャンヌはいるかい？」

ロイ様は、にこやかに軽やかに笑顔を作る。それが、僕には眩しかった。

「いえ、お出掛けになりました」

僕の言葉を受けて、ロイ様は途端に表情を鈍らせた。

「……そうか。いつもの仕事かい？」

「いえ。ご友人の方がお迎えに来ました。パーティーに出席なさるとかで慌てて出て行かれましたけど」

「ああ、そっちで行ったのか。そうか……一足、遅かったみたいだね」

ロイ様は独り言のように呟く。

もしかして、ジャンヌ様とお約束でもしていたのだろうか。もしそうなら、なんて失礼な事をしてしまったのだろう。知っていたのなら、何としてもジャンヌ様を引き止めておいたのに。

「あの、ジャンヌ様とお待ち合わせ……ですか？」

恐る恐る聞いてみた。温和なロイ様が怒る事などないと分かっているだけだ。

「ん？……ああ。違うよ。約束はしていないんだ。僕が勝手に押しかけてきてるだけさ。そうか、行ってしまったのか。それは残念だなあ。せっかく彼女のドレス姿を傍で見られると思っていたのに」
残念そうな顔をしながら笑顔は崩れていなかった。約束を取り付けていなかった事で、簡単に諦めがついたのだろうか。傷ついている様子は感じられない。

「ところで、ドレスは何を着ていったのかな？」

いつもはクールな空色の瞳に、好奇の色が宿ったのが見えた。

「ドレス……ですか？ 着の身着のままで行かれましたが……？」

「着のみ……って……。ドレスを着ていなかったのかい?! パーティーに出席するのに?! どうして……?」

ジャンヌ様がいなかった事よりも、ドレスを着ていなかった事の方に驚きを覚えている様子だ。珍しく、声が興奮している。

「ええっと、そうですね。説明しますので、宜しければ中へどうぞ。お茶をお入れします」

ずっと店の前で立ち話をしているのも、変に目立ってしまうと思い、ロイ様を店の2階にある応接室へと案内して、店を閉めた。

「ジャンヌは、ドレスを嫌がったのかい?」

応接室のソファに腰を下ろしたロイ様は、少し不安気だった。

「いえ。そういう訳ではありません。最初からパーティーに出席する気は無かったようですよ。お迎えが来られても、きっぱり断っていらっしやいましたから」

僕は、ロイ様の前に紅茶を差し出しながら言った。

「ありがとうございます。では、ドレスは?」

「途中で購入されると、ご友人の方がおっしゃっていました」

刹那、ロイ様のカップを持つ手が静止した。

「ロイ様?」

でもそれはほんの一瞬の事で、僕が呼びかけたときには優雅にカップに口をつけていた。

「なるほど。慌てていて忘れてしまった、という筋書きか」

「え? ええ。その様なところです」

ロイ様の言い方には、少し違う意味があるような気がしたのだけど、それが何なのか僕にはよくは分からなかった。

「それでは仕方がないな。僕のドレスを着てもらうのは、またの機会を待つとしよう」

僕の……ドレス? もしかして、白い箱に入っていた、あの深紅のドレスの事だろうか。

もし、そうならば、既にジャンヌ様は袖を通している事になる。

美麗様と一緒に行かれた男性との会食の席で着ていた筈だ。

「ロイ様？ ドレスとは……先日ジャンヌ様の為に頂いた赤いドレスの事でしょうか？」

「そうだよ。フェクト……ん？ なぜ赤だと知っているのだね？」

あの箱をジャンヌは開けたのかい？」

ロイ様の声は高揚していた。

「あ、いえ。先日、ご友人との会食があったのですが、突然の事でしたのでジャンヌ様は、そのドレスを着ていかれました」

「そうか……そう……着てくれたのか」

途端に、ロイ様の表情が明るくなった。本当にジャンヌ様の事が好きなのだ。

男性との会食へ行った事と、実は箱を開けるのを嫌がっていた事は黙っていた方が良さそうだ。

空になったティーカップをテーブルに置くと、ロイ様は立ち上がった。

「それでは、僕はこの辺で失礼するよ」

「宜しいのですか？ ジャンヌ様は直ぐに戻られると仰っていましたたが」

いつもなら、何時間であろうと、朝になってしまおうと、ジャンヌ様を待つ事を厭わ^{いと}ないロイ様なのに。

「いや。これから行かなければならないところがあったね。また、来るよ」

そう言って、応接室のドアを開けると、立ち止まり僕のほうを振り向いた。

「フェクト。美味しい紅茶をありがとう」

ボタン、と扉がしまる。

ああ、やはりステキな方だ。ジャンヌ様にも見習ってもらいたい。

僕はしばらく、ぼうっとしたままその余韻に浸っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0906/>

僕の憧れの人 ジャンヌSS

2010年10月8日15時22分発行